

ペチュニア タイダルウェーブ™ シリーズ

学名: *P. x hybrida*

種子粒数の目安: 約1,200 粒(ペレット種子)/グラム

プラグ生産ステージ

【スプレディングの性質は苗を移植した後から始まります。タイダルウェーブに関しては、プラグ生産の段階では通常のペチュニア苗と同様の管理方法をとることが可能】

培地

水はけがよく、ピート主体の新しい用土を使用。培地の pH は 5.5 から 6.0、また EC は中庸(0.75mmhos/cm(1:2))を維持する

播種

タイダルウェーブは、播種時に覆土しない。播種後は、ペレットを完全に融解させるため十分に水を含ませる

温度条件

発芽ステージ:	22 から 24°C
子葉展開後のステージ:	20 から 24°C
本葉展開後のステージ:	18 から 21°C
プラグ育苗ステージ:	16 から 18°C

光条件

発芽ステージ(ステージ 1):	100 ルクス(10f.c.)以上
発芽後のステージ:	10,000 から 30,000 ルクス(1,000 から 2,500f.c.)

その後の育苗ステージ: 温度がコントロールされていれば 54,000 ルクス(5,500f.c.)

湿度:

子葉展開までは相対湿度 100%を維持する。その後、相対湿度を徐々に低減し、プラグの成熟期にはだいたい 50%程度に下げようとする

培地の水分:

ステージ 1 の間は、最適な発芽条件を整えるため、培地の水分量を平均よりも高めに設定する

肥料設計

幼根発生時:	50ppm (N)リン酸割合の低い硝酸態肥料を用いる
子葉展開時:	肥料の濃度を 100 から 150ppm (N)リ上げる。EC は 1.0 から 1.5mmhos/cm(1:2)を維持

生長制御(矮化処理)

タイダルウェーブの育苗時の生長制御は、まず環境面の条件、また栄養やかん水の管理などによってコントロールし、また必要であれば矮化剤による化学的処理を行う。苗の徒長を避けるため、育苗の段階ではアンモニア態窒素の使用を最小限にとどめる。温度差による生長制御(DIF)も丈の伸長を最小化させるためには有効である。矮化剤による化学的処理の前に、まず試験を行うことが望ましい

【B ナイン】 5,000ppm の濃度で 1,2 回散布する。最初の散布は本葉が 2,3 枚展開した時点。2 回目はその 1 週間後を目安とする

【ボンザイ】 ステージ 3 の後半(本葉が 2,3 枚から 3,4 枚展開した頃)で 6ppm を 1 度散布する

鉢上げから出荷まで

コンテナサイズ

10.5cm(あるいはそれ以上)ポット:	1 本植え
15-20cm ポット:	2 から 3 本植え
25cm(バスケット等):	3 から 4 本植え

※性質が旺盛なので、カットバックや 9cm ポットは推奨しない。最小でも 10.5cm 以上が望ましい

用土(培地)

水はけがよく、ピート主体の新しい用土を使用。土壌 pH は 5.5 から 6.3 が適正、培地の初期の養分量は中庸とする

温度

昼間温度:	16 から 18°C
夜間温度:	14 から 16°C

※タイダルウェーブは、低温であっても概ね 2°Cくらいまでは耐性をもっています。ただし、適切な日長条件のもとでは、到花期間の早晩は生産時の温度の平均値に影響を受けることを覚えておきましょう。タイダルウェーブは、低温の条件では開花までより長い時間を要します

光条件

温度が適正に保持されている間は、できるだけ高く維持する

肥料

タイダルウェーブでは、通常のペチュニアの生産で示されている肥培よりも多くの肥料を必要とします。最良の結果を得るためには、かん水と交互にバランスのとれた肥料を 200 から 300ppm の濃度で与えます。出荷が近づいた頃に葉色が黄色くなるのは肥料不足のサインなので気をつけましょう。店舗納品後の株もち、また購入者によりよい株を提供するために、出荷の約 10 日前に置き肥の投与を推奨

矮化処理剤

パンアメリカン・シードの試験圃場(合衆国イリノイ州)で行われた矮化剤試験では、以下のような処理方法で効果が確認された。この処理方法のレシピは、直径 15 から 20cm ポットによる分枝のしっかりした草姿とともに、開花時は株の直径が約 20 から 25cm になっていることを想定しています(花が一面について、販売時に最高の花立ちを提供)

【15 から 20cm ポット】 苗の移植後 7 から 10 日後に B-ナイン 3,000-5,000ppm を散布。さらに 1 週間にもう一度散布する。ボンザイの場合は、移植後 3 週をめぐり、あるいは枝がポットのへの達した頃に 5ppm でかん注する。さらに必要であれば、花芽が目視できた時点で、ボンザイ 30ppm を追加で散布する

【ハンギングバスケット】 苗の移植後 7 から 10 日後に B-ナイン 3,000-5,000ppm を散布。さらに 7 から 10 日後にもう一度散布する。ボンザイの場合は、移植後 3 週をめぐり 30ppm を一度散布する。必要であれば、ボンザイの二度目の追加散布も可能

B ナインの使用は分枝促進に効果がある反面、開花が約 1 週遅れる可能性がある。ボンザイでは開花遅れの影響は見られない。花壇等へ地植えした場合、どちらの矮化剤も切れが早く、後々まで影響は残りにくい。※化学的矮化処理剤を使用する場合は、地域的な使用制限の有無を確認し、また使用表示に則した利用方法をとる

日長時間との関係

タイダルウェーブは日長に影響を受けやすいシリーズで、開花には 12 時間以上の日長条件が必要。13 時間以上になると開花が加速化される。タイダルウェーブをシーズンの早い時期に生産、出荷する場合は、移植後に電照補光することで生産期間を短縮することが可能。明期延長、暗期中断ともに有効である

平均的な生産期間

播種から移植まで(392/406 穴トレイ): 5 から 6 週

移植から出荷適期まで:

春期(長日条件) 6 から 9 週

夏期(長日/高照度、最低温度 18℃以上の条件) 4 から 7 週

播種から出荷まで

コンテナサイズ	定植本数 /ポット	出荷までの週数
春期: 11 から 15 週		
10cm (10.5cm)ポット	1 株	11-13 週
15-20cm ポット	2-3 株	11-13 週
25cm バスケット等	3-4 株	13-15 週
夏期: 9 から 13 週		
10cm (10.5cm)ポット	1 株	9-11 週
15-20cm ポット	2-3 株	9-11 週
25cm バスケット等	3-4 株	10-13 週

予想される病例、虫害等

適正な管理のもと、いわゆる IPM(総合的病害虫管理)が行なわれているのであれば、病気や虫害によるとくに大きな問題は少ないと考えられる

店舗におけるワンポイント・アドバイス

- タイダルウェーブは、店頭では遮光あるいは日除けのあるベンチやコーナーに置くことが望ましい。直射日光の下では水がすぐ乾き、水やりの頻度が上がってしまう
- タイダルウェーブは、水を乾かし切らないように注意する
- ベンチ等への配置では、株どうしが触れるか触れない程度の間隔でスペースをとる
- 店舗においても、週に 1 度くらいの頻度で液肥を与えると株の質や健康が維持される
- 店頭でガーデナーへ、タイダルウェーブが育ちの早い植物であることを認知させる。花壇などへ植え込めば 2,3 週のうちにスペースいっぱい広がる特性を有している

購買されるガーデナーへのワンポイント・アドバイス

タイダルウェーブを定植(またはコンテナなどを配置)する場合は、日あたりのよい場所を選びましょう(少なくとも 6 時間以上、直射日光が入る条件が最適)。タイダルウェーブは肥料を多く必要とする植物なので、忘れないようにしましょう。また、水を乾かし切らないよう注意しましょう。旺盛な株質を維持する上で、汎用タイプの肥料を 10 から 14 日に一度必ず与えます。施肥の際には、製品ラベルの濃度等を参照にしましょう

タイダルウェーブは、植え方によってとてもユニークな性質を有するペチュニアです。どのくらい定植間隔(スペーシング)をとるかによって、株の生育状態が変わってきます。つまり間隔を狭めれば、より上方向に向かい、立体的な株姿を形成します

- タイダルウェーブは、密度のあるマウンド状の株に育つので、花壇への定植間隔は 30cm とする。その定植間隔であれば、40 から 55cm の丈が出た後でも、また固い枝どうしもシーズンを通して十分に育つスペースとなる
- 例えば壁面などに遮られたような制限のあるスペースでも、このペチュニアは旺盛に、30 から 60cm ほど縦方向へブッシュにするを伸ばすように育ちます
- 花壇では最大で 60cm の定植間隔(スペーシング)をとることが可能です。この場合、タイダルウェーブは直径 75 から 90cm にまで達し、グランドカバーのように広がります。シルバーとホットピンクは 25 から 30cm といくぶん丈が出やすい性質で、一方チェリーとパープルは 20 から 25cm の低位の丈でまとまります

注意点:

- 同品種を生産するにあたって、ここで示されている栽培情報は基本的な参考資料としてご利用ください。生産された植物は、気候条件や地理的な緯・経度、また作型の時期、ハウスの環境によって結果が異なることがあります
- 殺虫・殺菌剤、また矮化剤の使用についての記載はあくまでもガイドラインであり、必ず使用方法を十分にまた正しく読み、使用者の自らの責任のもとでそれに則った正しい使用方法をとるようにしましょう